

指定討論・質疑応答

〔討論者〕 寺田 拓真（広島県総務局付課長／元 文部科学省教育改革推進室専門調査官）

〔討論者〕 酒井 淳平（立命館宇治中学校・高等学校）

〔コーディネーター〕 乾 明紀（大学コンソーシアム京都 高大連携推進室員／
京都橘大学 経済学部教授）



乾： よろしくお願ひいたします。

それでは、今から1時間ほど、指定討論という形で進めさせていただきたいと思ひます。指定討論というのは、私も大学院に行くまではあまり聞かなかったんですけども、指定討論者、つまりコーディネーターである私がお二人のお話を簡単にまとめて少し質問を投げかける、そういう討論だというふうに思ひただけならと思ひておひます。私だけ独り占めするわけではなくて、皆さまから頂いた質問も、この場でお二人に投げたいと思ひておひます。

（スライド2）先ほど、私の肩書きだけが紹介されたんですけども、私は京都橘大学の経済学科に所属してはいますが、専門はキャリア心理学で、ここに書いてあるようなことを研究しておひます。これは、ちょっと前にテレビで、若者の早期離職についてコメントしろということて生放送に出ていて、緊張してはいる私の顔ですが、今日とどちらが緊張してはいますでしょうか。同じくらい緊張してはいるかもしれませんが、テレビはなかなか緊張いたしました。あとは、主な委員として、このような委員ですとか、高校の学

校運営協議会の役職などに就いて、高校での活動や、それに関連するような活動をしておひます。

私自身は22年前に、このフォーラムの1回目を事務局側として担当しておひました。当時は、私は大学の職員でした。大学コンソーシアム京都は大学の出向者が京都市の職員の方と共に事務局になって、いろいろな仕事してはいますが、当時は職員側として、裏方でこれを企画したりしておひました。そこから22年たつて、まさか教員側で、このような形でこの上に立つとは思ひておひませんでした。感慨深いものがありますが、それは置きながら、今日は指定討論者の大役をなんとかまっとうできたらと思ひておひます。どうぞよろしくお願ひいたします。

（スライド3）それでは、前置きが長くなりましたが、指定討論の流れになりますが、このような流れで進めていきたいと思ひておひます。フォーラムの趣旨を、簡単に確認をして、ご発表の整理、そして指定討論者の私がこんなことを気付きましたということ、それを基に私のほうからお二人に2つほど問いを投げさせていただきます。その後、参加者の皆さまから頂いた質問を投げかけるという流れでございます。

（スライド4）さて、まずフォーラムの趣旨確認です。お手元の今回のフォーラムの資料にもあるかと思ひますし、チラシにも書かせていただきましたけれども、今回のフォーラムは探究を通した学びが高等学校から大学、社会へと向か

う一人一人のキャリア形成がどのようにつながるのか、あるいはつなげるのかということなのです。加えて、学びの経験のほか、キャリア教育を通じた、より良い学校づくり、社会づくりのあり方を皆さんと一緒に探っていこう、これが今回のフォーラムの趣旨でございます。その背景につきましては、冒頭に長谷川先生からいろいろと詳しく説明があったと思います。こういった趣旨に基づいて、寺田先生と酒井先生のお二人に、ご講演をお願いしました。

(スライド5) まず寺田先生のご講演はどんな内容だったかということ、私なりにポイントをまとめさせていただくと次のようでした。まず最初は、日本を含めて世界に共通する教育の課題は動機付けの入口部分と転移の出口の部分、この2つであるというお話がありました。これらに共通するものは、全て学びの価値付けの問題ではないかということです。生徒自らが発見して、価値付けができていないことが問題であって、それをいかに価値付けしていくように教育で支援したり、指導することが大事だというお話でした。本日のテーマであります、探究的な学び、あるいはキャリア教育も、対話を通じて学びの価値を探す旅ではないかというお話がありました。そして、この旅は時間と手間が非常にかかります。だからこそ高大が集まる、あるいは高大社も入れてもいいかもしれませんが、連携が大切であるというお話がございました。

そして、次に、教育改革や主体的な学習、学修を実現するためには自己決定理論の3要因が大事だというお話がございました。1つは自律性、それから2つ目が関係性と協働性、そして3つ目が自己有能感、この3つが非常に大事だとありました。デシの理論を基に、このようなことを講演で発表していただきました。また補足があれば後ほど、これ以外にこれを押さえてほしいというものがありましたら、ぜひ言っていただきたいと思いますが、このような内容でございました。

(スライド6) そして、一方、酒井先生からは、日本はテストの成績は世界トップレベルです。しかし、長谷川先生の冒頭の説明にもありましたけれども、将来の夢がないとか、自らを社会の作り手とっていないというようなデータを挙げながら、このような課題を示されました。そして、その要因は何かというと、お客さま、サービス受益者という認識が生徒にあり、さらに管理、指導による学習モデル、これが生徒の頭の中にあります。つまり、生徒観があります。これが将来の夢を描けなくしているとか、社会の作り手にさせていない原因ではないかというお話がございました。

そして、この生徒観を変えるには、学校での出会いや原体験が大事だと、これを実際の事例にも触れながらお話を頂きました。そして、さらに加えてキャリア教育が大事だというお話がございました。また、総合的な探究の時間は、キャリア教育の視点を持って取り組むことが大切であるというお話がありました。そして、キャリア教育を含む総合的な探究の時間、それにおける課題設定は生徒自らがマイテーマを見出すチャンスではないか、こういう内容のお話がありました。一方で、ちょっとかわいらしい子どものお写真もありましたけれども、お客さま的なキャリア教育です。完全に準備され過ぎた、インターンシップ的なのとか職業体験的なキャリア教育はNGではないかというお話がありました。

時間がなくて、少し駆け足になってしまったところもあるのですが、マイテーマづくりについては、振り返りと対話が非常に重要であるというお話がございました。そして、高大連携は少子化や人口的な変化もあったりして、選抜から育てるに変えていかなければいけないということにも触れていただきました。そして、My Learning StoryやWillを共につくっていくことが大事ではないか、こういうようなお話があったように思います。この辺は大丈夫でしょうか。

何か補足、もっとここが言いたいとか、言い残したことなどは大丈夫ですか。こういったお話が1部、冒頭の基調講演でございました。

(スライド7) それを受けて、私なりの気付きですが、皆さまもさまざまな気付きを得られたと思うのですが、私的には、まず酒井先生の振り返りの対話、少し駆け足になりましたが、マイテーマやMy Learning Storyづくりは寺田先生の学びの価値付け、転移、それから動機付けの実戦ではないかというふうに感じました。

(スライド8) 有名な探究学習サイクルをどれだけ回すかが大事とか、それから最近ではOECDの提言の中でも出てくるAARサイクルも大事であると言われております。いずれにいたしましても、このようなサイクルが大事な中で、探究の学びを価値付けしたり、さらなる学びやキャリアの見通しにつなげることが課題になっているのではないかと改めて気付きました。

(スライド9) 講演の中でも触れていただいていますけれども、お二人に改めて探究の学びはどうすれば価値付けされるのか、これは生徒や教員も含めてですけれども、言い足りないこともあるかもしれませんので、これについてももう1回、聞いてみたいと思います。どちらからでも結構でございます。



寺田： これが分かればノーベル賞です。教育界のノーベル賞ものだと思います。すごく深いテーマで、これをやればできますとか、これをやればうまく行きますというのがあるわけではないと思います。なぜなら、先ほどの、広島の実践は社会構成主義に転換していきましようとい

うお話ですけれども、当然、子どもたちの興味・関心も違えば、バックグラウンドもアイデンティティも何もかもが違うわけですよね。ですから、どれが引っかかるかというのは、先ほどの確率ではないですけれども、その子に応じて、はまることもあれば、はまらないこともあるし、うまく行くこともあれば、うまく行かないこともあるという連続なんだと思います。ただ、それを一般化して考えてみると、私はとにかく自己決定理論なんです。だから、自律性と関係性、協働性と自己有能感というものを活動の中にどれくらいデザインできるかというところが、すごくポイントになってくるのではないかというふうに思っています。

1個、事例をご紹介します。これも万能ではないです。全然万能ではないですけれども、広島で私たちがやってきた事例を1個、ご紹介します。2015年から2017年にかけてOECDや東京大学と組んで、広島創生イノベーションスクールというプロジェクト学習を実施したものがあります。丸2年かけてやりました。それは学校がやるのではなくて教育委員会直轄で、高校生向けのプロジェクト学習会をやっていました。1カ月に1回くらいみんなが集まって、2年かけて議論したり、実装したりしながら、テーマとして2030年の広島と世界がより良くなるためのプロジェクトを企画して、動かしてというのをやりました。これは、高校生だけではなくて、大学生、社会人、さらに学校の先生、NPOの方にもメンターで入ってもらい、マルチセクターみたいな感じで、いろいろな人たちに入ってもらって、広島の学びの変革の1つのモデルプロジェクトとして、そういうことを2年間やってきたことがあります。

そのときも私たちの頭の中にあったのは、自律性と協働性と自己有能感だったんですけども、1つポイントにしたのは、先ほどの話のように、振り返りと対話です。振り返りと対話を通じて自己有能感をどれくらい感じてもらえるかで

す。自己有能感から活動を結び付けることができれば、つまり、あのとき自分は成長したと、なぜ成長したのかと考えたときに「ああ、あれがあったかだ」となったら、価値づくりではないですか。そういう活動をどれくらい入れられるかということで、振り返りを大事にしようという議論をみんなでしました。

振り返りというと、定性的か定量的か、大体この2つのどちらかにしたがります。定性的になると、自由記述で「今日の学びはなんですか」とか「今日、分かったことは何ですか」みたいなことを書かせるやり方をすると思います。定量的になると、ルーブリックをつくって、コミュニケーション能力、1、2、3、4、5の定義はこれと言って、3とか2とか4と書きます。そういった形で定量的に実感してもらったりやり方と、2つがあります。われわれが考えたのは、どちらも不十分ではないかということで、いいとこ取れないかといってやったものをちょっとご紹介します。スライドを出します。

いいですか。ちょっと待ってくださいね。

(スライド10~13) 毎回、活動が終わるたびにリフレクションをしてもらっていたんですけども、そこで使ったシートは、こういうものを使いました。もし欲しければ、後でご提供します。広島創生イノベーションスクールというプロジェクト学習で、生徒の皆さんに身に付けてもらいたい資質能力はこういうものですよというものを配っています。創造性とイノベーションでいったら、1から10まであります。1が1番下、10が1番上です。1と10だけ定義を書いてあります。選んでもらった上で、なぜそう思ったのを書いてもらいます。選んでもらうことを定量的にやっています。こちらがルーブリックを一方的に示して、当てはめて評価しなさいとやっているのではなく、自分でルーブリックをつくるわけです。他者評価でもあり自己評価でもある過程の中に自分自身が関わっていて、これを自分でつくってもらった後に4~5人のグループで対話してもら

ことをやりました。そうすると「なんとかちゃん、4ではないよ。今日は、ああいう発言してたじゃん。6だよ」というフィードバックがあったり、他の人の発表を聞いていて「7だと思ったけど、2かな」というケースが生まれていきます。対話を使って、振り返りをして、自己有能感を高めていってもらったりやり方をしています。

これをやってどうなったかということ、これが面白いんですけども、2年やってみて、上がって、下がって、また上がるというプロセスになりました。なぜ下がるかというと、質的に変化します。例えば、コミュニケーション、コラボレーションみたいな項目があるんですけども、ここで言うと、最初のうちは「自分の役割がちゃんとできませんでした」の2から始まります。そこから「できました」の7になるんですけども、あるときを境にして「それはコラボレーションではないと思う」という話になって、他の子たちの良さを引き出すとか、自分にしかできないことは何かとか、他の人たちと協働するためにどういうことをやればいいのかを考えるようになって、そういう視点で見ると自分は7どころか3だといって、戻って行って、最後にもう1回伸びるみたいなプロセスをしていきます。それは、まさに活動の価値付けというか、学習の価値付けというか、自分たちの中での目指すところと学習の意味合いが形成されていく形になったと思っています。こういうような振り返りをうまく対話を組み合わせて、そして自己成長、自己有能感につなげていくような仕組みを入れていきつつ、学習活動の中に自己決定の中身を入れていくのがすごく大事かと私は思っています。

乾： ありがとうございます。ちょっとだけ言いますと、ルーブリックが1と10だけ決められるのがすごくいいですね。ルーブリックをつくるときは、各段階が、どう違うのかっていうのをあえてつくらないといけない。これがしんどくて、結局、ルーブリックづくりが嫌になって、ルーブリックづくりが疲弊するというのがあります。

ルーブリック批判するわけではないですけども、今のような形も1つありかと思えます。そして、振り返りとAARでいう、もう一つのAnticipationの、見通しづくりになっているところもあるかと思いました。

酒井先生、先ほども、振り返りをやらされているのではなくて、仲間と一緒に和気あいあいとやるとおっしゃっていました。最近では、学生に何か言うと、すぐに駄目出しと言うんです。良かれと思って言うのも駄目出しになってしまうところがありますので、否定ではなくて前向きな見通しを立てる、どうすればサポートと感じてもらえるか、そのために今のような仕組みがあるのが大事なかなと思います。寺田先生、ありがとうございました。酒井先生、行きましょうか。



酒井： 今のご質問が価値付けだったんですけども、寺田さんが振り返りのことを紹介されたので、先に振り返りからしたいと思います。似ていて、びっくりしたんですけども。

(スライド14)先ほど、本校で課題設定という話をさせてもらったんですけども、チョコプロと言いまして、1週間だけプロジェクトする授業があります。それは、他人を喜ばせるプロジェクトをするということを自分で決めて、1週間やります。本当にいろいろなプロジェクトが出てくるんですけども、われわれが大事にしているのが振り返りです。1回目のプロジェクト終了後の授業では、こういう振り返りをします。

(スライド15)いろいろなプロジェクトがあって、さまざまなんです。玉石混交なんですけれども、生徒にまず自己評価として、そのプロジェ

クトをやってみてどのくらい気になったとか、情報収集がどれくらいできたとか、アクションの具体性はどうだったか、そもそも取り組み方はどうだったかみたいな形で、1回、生徒が自己評価をします。

(スライド16)自己評価した上で、次にチームを組んで、プロジェクトについて、こんなことをしたという説明と、今、書いた自己評価をしゃべります。それに対してフィードバックをもらって、もらった後、もう1回、個人で振り返るという作業をします。やりたいことは、別にプロジェクトの評価をしたいわけではなくて、自分なりに1回プロジェクトをつくってみました。それが結果どうだったのかを確認してほしいんです。授業ではこれを踏まえて改めて2回目のプロジェクトをしますので、もちろん1回目良かった子はそれをブラッシュアップしますし、がらっと変える子もいます。

(スライド17)我々としては、まとめ表現をした後に次の課題設定に行く、ここは振り返りがポイントではないかと思いながらやっています。

余談なんですけれども、チョコプロを授業でやるとなったときに、定年直前のある先生が「酒井君、俺もやってみる」と言われました。お子さんが大きくなって奥さんと二人だったので、「1週間みそ汁プロジェクト、妻にみそ汁をおいしいと言わせる」ということで、本当にそれをされました。そしたら、そのクラスは生徒の振り返りが良かったです。多分、その先生が何か声かけをされていたと思うんです。詳しくは分かっていないんですけども、プロジェクトされたのはすごいなと思ったのと、何かあるのだろうと思いました。

(スライド18)そして、話を戻させてください。今のものが振り返りなんですけれども、プロジェクトの価値付けについては私も本当に分かってはいないんですけども、学校現場の感触だけで言いますと、これはある生徒の例です。今、3年生の生徒で、中学校からうちに来て

いたんですけれども、なかなか打ち込めるものが見つけられずにずっと来ていた子でしたが、廃棄苗に注目したプロジェクトに取り組むことになって、それがはまったみたいです。結果的に、これをテレビ東京で長く取り上げていただきまして、賞ももらいました。振り返りってみると、プロジェクトという選択をした自分を褒めたいとか、やりたいことが明確だと生きていて楽しいとか、探究は自分がやって楽しいことを見つけるためにあることだと振り返っていました。多分、この生徒にとっては、探究の学びの価値は位置付けられていると思うんですけれども、我々は学校にいますので、こういう生徒を見ることで、我々教員の意義を確認できる場面はすごく多いと思っています。ですので、結局、我々教師ですから、生徒の姿こそが一番価値付けされるのかなと思ったりします。

この点で1個だけ私なりに思っていることがあるんですけれども、探究となると、やる気のない先生がいるみたいな、温度差の課題感を話されている方がいて、それは本当によく分かります。学校は、みんなでそろえてこれをしましようみたいな、マイナスをなくしてゼロにしようという動きがすごく強い気がしています。せめて探究くらいは、やる気がなくても50分ちゃんと教室にいたら、それでいいではないですか。むしろ、やりたい先生がゼロからプラスにしていくことを認める職場のほうが、結果的に価値付けられるのではないかと思ったりしています。

乾： 寺田先生が思いっきりうなずいておられました。今のことについて何か補足なりコメントがありましたらお願いします。

寺田： 先ほどのイノベーションスクールで言うと、学校の先生は、最初はやりたくなくて来ている先生がしばしばいたわけです。しかも高校生たちが深遠なテーマを設定したりする中で、教育委員会事務局からのメッセージとして「これは子どものプロジェクトなので、子どもに決めさ

せてください。先生が決めては駄目です。引っ張っては駄目です」と言ったら、どうなったかという「ほったらかしにしておけばいいでしょう」みたいな感じで、先生方が教室の後ろのほうで文庫本を読み始めるわけです。これはまずいと思って「関わってください」と言ったら、関わった瞬間に「こんなものでは駄目だ。これではプロジェクトとは呼べない」みたいな話が始まってしまって、こっちに行ったり、あっちに行ったりという状況をちょっとずつ補正して、落ち着けていくという作業をしていました。

どういう先生が一番変わったかという、実は最初に否定的だった先生が一番変わりました。否定的に見ている先生は、熱意があるんです。反対するのは結構大変だから。自分にはこういうポリシーがあるんだというところを、それをガラポンで全部変えてくださいと思わせてしまったところがあったのではないかと思っています。生徒の姿が変わったときに、生徒がプロジェクトを進める中で「先生、これ、数学をやらなくてできないわ」と言い始めたりして、その中で、数学の先生が「来たぞ！」みたいな感じになったりします。そういう生徒の変容を通じて、別に自分自身の今までのものが否定されるわけではないことが分かります。価値付けることは、先生にとっても、自分自身の今までの人生の学びの軌跡というか、教育の軌跡を価値付けてあげるプロセスと一緒に思っています。教育行政の立場からすると、それをどれくらい仕組んで上げられるかがすごく大事な気がします。

乾： ありがとうございます。生徒だけではなくて、先生の価値付けも非常に大事なところだと思います。やる気のないところで言いますと、この間、探究の中間報告に対するコメントをするために、ある高校に行きました。なぜ探究をするのかをテーマに発表する生徒がいて、その生徒の顔が全然やる気がなかったのです。「なぜ探究をテーマにしたの？」と聞くと「だるいか

ら」と言いました。「なるほど。だるいからテーマにしたのね。学校へ行っていて、ほかに同じようにだるいことある？」と聞くと、「宿題がだるい」と言われて「そうだろう」と思いました。僕は最初「なぜだるいのか」をテーマに探究をしたらいいと思ったんですけども「逆に、だるくないものは何がある？」と聞いたら「文化祭はだるくない。楽しい」と言ったのです。探究と文化祭は似ていることをしているのに、方やだるいという価値付けが行われて、方や楽しいという価値付けが行われている。似ているのになんだろうなと思ひまして、後で先生と結構その話をしました。

一方で、私のコメントとしては、だるいというのが本音なので、そこを変にいい子ちゃんというか大人が思うような答えを結論にせず、なぜだるいのかという高校生の魂の叫びを発表に盛り込んだほうが、先生も楽しいし、意義があるものになるし、ぜひ共同研究しましょうという落ちを付けて終わりました。価値付けの問題は、ちょっとしたことで分水嶺があると思うので、それをどのようにやるのが大事かと思ひました。

(スライド19) 次の気付きと質問に行きたいと思ひます。お話を聞いてちょっと思ったのは、お話以外のことも含めてなんですけれども、探究学習は中間報告とか、成果報告とか、発表会を全国規模で実施することが増えていると思ひています。そういうものに呼ばれたりする機会も増えました。こんな探究をやりましたというのは多いんですけども、一方で生徒が自己のあり方と生き方、キャリアの探究プロセスをまとめて報告する機会はあまり目にしないと思ひます。大々的に「私は、こんな生き方です」「あり方です」と言うのは難しいのかもしれないですけども、振り返るといいですかまとめる機会があってもいいのかなと思うのに、探究ほど盛り上がっていない気がしています。

(スライド20) キャリア教育は扇の要というふ

うに言われています。これは学習指導要領で「生徒が学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科、科目等の特質に応じたキャリア教育の充実を図ること」と書かれていまして、それを図式化したらこのようになるのかなと思ひ、扇を使って図式化してみました。特別活動というのは狭義のキャリア教育と思ひました。いろいろな科目での学びをまとめて、その振り返りをして、そして見通しを持っていくことが大事だというふうに学習指導要領で言っているのではないかと思ひています。酒井先生のお話にもありましたけれども、キャリア教育というのは探究と比べて、オワコンではないですけども、新しい探究に上書きされてしまったみたいで、最近、注目度が落ちているのではないかと思ひます。

(スライド21) そんな中で、私からの2つ目のご質問なんですけれども、学校でのさまざまな学びの成果、文化祭でもいいですけども、いろいろなものがある中で、それをまとめて自己のあり方、あるいはキャリア、あるいは学びの見通し、機会としてのキャリア教育はなぜ探究学習ほど盛り上がらないのか、どうしたら盛り上げることができるのか、これについて少しお答えいただけますでしょうか。



寺田： なかなか簡単ではないと思ひますが、3つのことを申し上げたいと思ひています。1つ目は、この間、あるNPOの人と話をしました。その人はキャリア教育の専門家ではなく

て、命の教育の専門家の方です。私の本の中で、子どもの自殺をゼロにしたいということを強調して書かせてもらったんですけども。自殺予防の教育をやっておられるNPOの人です。その命の教育の方は「命の教育は近過ぎるし、遠過ぎるんです」とおっしゃっていました。何も起こってない状態での命の教育は遠過ぎるし、切羽詰まった状態になると近過ぎてしまって、その時点で命の教育をやっても効かないケースが結構あります。キャリア教育も、近過ぎて、遠過ぎる気がしませんか。つまり、キャリア教育が近過ぎる状態になったら、キャリア教育ではなくて、もはや職業教育になってしまいます。だから、インターンシップみたいな話になったり、職業体験になってしまいます。遠過ぎる状態だと、実感が持てないから、いくらキャリアだ、生き方だ、あり方だ、と言われても、なかなか実感が持てないという、キャリア教育のある種の特性みたいなものがあるという気がしているのが1つ目です。

2つ目は、酒井先生以外で、学校の先生でキャリア教育が得意だと言っている人に僕は会ったことがないです。とりわけストレートに学校の先生になってこられた方は、6歳から二十何年、三十何年、ずっと学校の中で過ごしているわけです。キャリアと言われても、これしかやっていないし、ここでしか生きていないみたいな状態です。しかも「学校の常識は社会の非常識だ」と言われるわけです。そこで「何を教えればいいのか。俺のキャリアを教えたって」という話になるので、得意な分野ではないと思っています。そこら辺を外注で誰かに投げたしまえばいいという発想も、もしかしたらあり得るかもしれないですが、投げたしまえば、扇の要にならなくなって、独立してしまうんです。偉い人が来て「夢を持って」みたいな講演が始まったり、NPOの人が体系的なプログラムをやってくれたりしますけれども、それでも日頃の先生の授業とはつながっていかないことになるか

ら、そういう意味でも先生の役割が大事なんですけれども「俺が、私が、言うてはいけないよね」みたいな感じがあるのではないかというのが2つ目です。

3つ目は、それを解消できるかどうかは分からないというか、やり方の話ではないんですけども、最近、感動したことをご紹介して、希望を感じていただけたらいいかなと思います。先ほど、ご紹介をしましたが、広島叡智学園という中高一貫の学校をつくりました。全寮制で、留学生がいっぱいいる、バカロレアの学校です。広島県の大崎上島という離島にある公立の学校です。この学校はバカロレアが目立っていますけれども、創設当時にみんなで「探究とキャリアをしっかりとやるぞ」と話していました。私はこの学校が開校した後、しばらくして離れてしまったので、今はどうなっているか分かりませんが、ただ、当時の理念が仮に生きていれば、という前提でお話をします。この学校は中学校1年生から高校3年生までそろっていて、今年度、卒業生が出ます。1学年40人しかいない、すごく少人数の学校です。こんな事例がありました。

(スライド22,23) この子は「Forbes JAPAN」に載りました。叡智学園の高校1年生の女の子が、鹿児島県の廃校の小学校を復活させて、普通の学校をつくりたいと言っていました。先ほどの酒井先生の話の、生産者側になる、学びの作り手になる1つの事例だと思っています。

高校1年生で、教育を受けるわけではなくて教育をつくる側に回ろうとしているんです。何が効いたかを考えたときに、いろいろあると思うんですけども、叡智学園の中学校の入試は2泊3日の合宿なんです。一次にはペーパーテストもありますが、二次試験は100人が40人に絞られる2泊3日の合宿で、グループワークで答えのない問いみたいなものを、みんなでパネルディスカッションや、ダイアログをかなりやります。

その中で、私たちの予期せぬ展開が起きました。全寮制の中では、コミュニケーション、コラボレーションがかなり重視されるから、そういう入試にしようと言ってつくったものの、1期生の子はいろいろなところを受けているだろうし、実績のある学校ではないので、辞退する子が出るだろうと思っていたんですが、帰り際に合宿所のげた箱を見ていたら、みんなが「みんなでこの学校に受かって、入って、一緒に社会を変えようね」みたいなことを言っているわけです。そこで仲間を見つけて、みんなで変えていくという事例がこれです。言ってしまうと、入学者選抜のときからキャリア教育をやっていたということだと思います。

そういう意味で言うと、中学校でもキャリア教育を重視した選抜ができるのだから、高校と大学ではもっとできるのではないかという気がしています。そういう接続とメッセージ性をどうつくっていいのか、1つポイントになるかなという気がします。

乾： はい、ありがとうございます。そうですね、私も昨日、一昨日と入試の面接をしてきたんですけども、今、半分以上は推薦入試で取る中で、2泊3日ではやっていないですよ。設営や準備はそれくらい時間がかかるかもしれないですが、実際の面接時間はなかなかそうはいかないです。AO入試といっても、アメリカのようにアドミッションオフィスが時間をかけて、何回も面接などでコミュニケーションを取るわけではなく、一芸に秀でたら、みたいなのがあります。だから、コスパ、タイパのいいことをやっているのかもしれないです。コスパ、タイパがいいからみたいなことだと、ちょっと、と思ってしまいます。人生ほどコスパ、タイパが悪くないものはないですから、コスパやタイパが良くないものをいかに意味付けていくかがキャリア形成だと思います。時間をかけてやればやるほど連帯が生まれて、変えていこうというモチベーションが上がります。いいですね。

では、酒井先生、他にございますでしょうか。



酒井： キャリア教育の話になるんですけども、私が思っていることで言いますと、先ほどの扇の要の話で言いますと、本来的にはキャリアパスポートがその役割を果たしていたはずだろうと思います。ただ、それがなかなかうまく行っていない学校が多い気がします。その理由は、自分の中で仮説が1個あります。何かと言いますと、我々教員が振り返って対話することの大事さが腹落ちしていないのではないかと思います。

私ごとになりますが、10年ほど前に、CDA・キャリアコンサルタントの資格を取りに学校に通わせてもらって、勉強をしたことがあります。そのとき職業人生だけではなくて、これまでの人生を振り返って、棚卸して、対話するという時間が多くて、振り返ることの大事さを実感できた瞬間でもありました。それまでの自分だって教員を10年以上していたわけですから、そのタイミングはあったはずですし、振り返りが大事と言ってきたはずなのに、腹落ちできていませんでした。もし先生方がもっと腹落ちできたら、振り返りはもっとできるのではないかと思います。

私が学年主任をしていたときに、担任会議というものをやっていました。学期の終わりや節目では15分、20分、1学期に経験したことや学んだことを5～6分で書いて、3人くらいのチームになってシェアするくらいのことをやったりしました。それをするだけでも、1学期の経験が学びに変わる瞬間だった気がします。独立行政

法人の教職員支援機構も、今は教員の学び方を変えと言われていまして、振り返りから学ぶことを意識されています。そういったことが同時に進んでいく中で、キャリアパスポートが今の形でいかどうか分かっていないんですけども、ああいうものが定着していけばちょっとずつ変わっていくかなとは思っています。

乾： ありがとうございます。寺田先生のお話で、社会構成主義的な学びになっているというお話もありました。社会構成主義というのは対話を通じて、自分の頭の中に世界を構成していくという考え方のことです。それはチョコプロでもそうかもしれないですが、小さな振り返りを何回もやる中でうまくなっていくと思います。大学生とかでも、それをやらないままで、いきなり自己分析をさせたりするんです。対話と振り返りをして、それまでの間に、自分を整理するトレーニングを高校のときにもいっぱいやっていただくと、自己決定ができるようになりますよね。その時間は大切にしてほしいなと思いますが、先生方は忙しいので、なかなかこれができないことがあります。そして、キャリアパスポートの批判的なものだけが先行して出てしまうところは残念なところかと思えます。

(スライド24) それでは、ここからは会場から頂いているご質問に対して答えていただくかなと思っております。会場の皆さま、お待たせいたしました。まずは酒井先生ということで「マイテーマの設定について、私は本校の2年次の探究において人文ゼミを担当しています。ここでは設定するテーマが社会課題の解決や自分のキャリアにつながらないものが多く、毎年、着地点が難しいという問題が残っています」。この問題は、私もよく聞きます。「個人的には生徒の興味・関心を大切にしたいですし、全てを社会につなげる必要ないと考えているのですが、このような人文系のテーマ設定について、どのように選出されているのかお伺いしたいです」。

数学の酒井先生に人文系のテーマは酷かもしれませんが、逆にそうだからこそ出てくるものがあるかもしれません。いかがでしょうか。

酒井： そうですね、私は数学なので、本当に答えにくいご質問ではあるんですけども。大きな課題です。SSHがずっと浸透していく中で、アカデミックな観点において、理系の課題研究は研究の入り口で比較的指導もできます。文社系はどうなのか、アカデミックなレディネスという点ではどうだろうということはありません。

この点について、私が思っていることなので個人的な意見にはなりますが、まず、難しいという以前に、そもそものアウトプットをどうするかという学校課題があると思います。例えば、生徒がプロジェクト的なことをやるということであれば、生徒がやってみたプロジェクト、学問の中でいえば地域課題とかであれば、自分たちのやったアクションは学問ならどういうことにつながるかということをちゃんと振り返る時間があれば、最近教材でもそんなものがいっぱいありますので多少はつながると思います。生徒のリサーチクエストから始まる、ミニ論文でも何でもいいのですが、稚拙でもいいので、いったんまとめた後で、もしくはまとめる前や、テーマを立てた時くらいに、何かのテーマに対していろいろな学問があるわけですから、どういう切り口で切るかが学問の特徴だと思います。そこで大学のパンフレットを見るでもいいと思うんですけども、このテーマについて、この学部の先生だったらこんな研究をしているくらいであれば、今の生徒は簡単に調べることができると思います。どの学問の切り口で切るかみたいなことを考えさせるだけでも、全員が行けるかはともかくとして、全体の平均値は上がるのではないかと思います。

乾： ありがとうございます。寺田先生から補足のコメント、何かプラスであればお願いします。

寺田： 難しいですよ。こうしたらいというのはあるわけではないんですけども、先ほど、ご紹介したイノベーションスクールでも、最初は小さいテーマから始まりました。みんなに挨拶するとか、自転車が倒れていたら直すとか「2年かけて、それをやるの？」みたいな話をしていました。それはそれで彼らなりに問題意識はあります。「そんなのでは駄目だ、もっと大きいものをやれ」と言ったら、広島空港を三原市から広島市に移すとか、どうやってやるんだというケースが出てきたりしました。でも、1回やってみたら広がったりつながったりするから、やってみることがすごく大事なのかなという気はしています。

今、福山市で働いていて、福山中学校という市立の学校があるんですけども、そこはマイ探究をやっています、この間、文部科学省からインタビューをしてもらいました。中学校の探究はグループやクラスでやっていると思うんですけども、マイ探究は一人1個なんです。一人1個で探究をやっているところはあまりなくて、中学校の教頭先生や関係の先生方に話を聞きに行ったら「どうですか？」と言ったら、死にそうな目をしながら「めちゃくちゃ大変なんです」と言っていました。

何が難しいかという、プロジェクトは「project」で前に行くから、どこに行くか分からないという状態です。自然科学系だろうが、人文社会系だろうが、プロジェクト学習は基本的にシームレスでボーダーレスだと思います。ここまでというものが無いから難しいと思います。自然科学系は実験が使えるので、ボーダーレス、シームレスなプロジェクトが学校の中で実験的に体験できるのが強みです。社会科学になると、ここで考えていても社会課題は解決されないから、外に出るしかなくなってきます。そうすると、シームレスなので、土曜日だろうが、日曜日だろうが、放課後だろうが、自分のプライベートの時間も使って学ぼうとしていくよう

な状態に、理想的にはなってほしいし、実際になることが多いです。そうすると先生方的には、どこまで見ればいいんだとなります。

イノベーションスクールをやったときに、ある先生が子どもたちに言っていたのは「先生、今度の土曜日にこういうシンポジウムがあるので、行ってきてもいいですか」と子どもが聞いた際「いや、いや、その日は、先生は部活があるから駄目、駄目。勝手に学ばなよ」みたいな話がありました。「勝手に学ばな」とは何なんだという話ですけども。そこら辺が、シームレスでボーダーレスだから学校の中で解決しないんです。そう割り切るしかないと思います。面倒を見られるのはここまで、学校で見られる部分ここまでだけど、学校で見られる部分だけで勝負しようとする人文社会科学系のテーマは面白くなるので、外に出ます。実際に土曜日や日曜日にもやるという前提で、学校でできる部分はここまでやるというスタンスでやらないと、いいテーマは書けない気がします。

乾： はい、ありがとうございました。私への質問ではないのですが、私からちょっとだけコメントさせていただきます。マイテーマの設定の前に、チョコプロみたいなものをどれだけやるかも結構重要なと思います。そこで慣れたらちょっと変わってくるような気がします。

もう1個、人文社会系に関することです。大学で社会学や心理学をやっておられた方は、社会調査士という資格を勉強された方もおられると思います。アンケートの採り方や調査の仕方を体系的な形で学べる資格です。社会調査のやり方をちょっと知っておくと、アンケートの指事がしやすくなるのではないかと思います。高校生の探究活動を見てますと、適当なアンケートとか倫理的なことに全く配慮されていないアンケートに出会うことがあります。自然科学に比べアカデミックにできていないとか、這いまわる経験主義みたいなものは嫌という方は、アン

ケートにこだわってやってみるのもありかと思ったりします。なので、社会調査士のことも調べてみられるのもいいかと思えます。

(スライド25)次は酒井先生です。「高大間で教育の接続を行う場合、大学側にどのような体制があればいいですか。大学の研究教育の情報発信、高大連携センター等の組織の設立などがありますが、先生が一番重要だと思うことは何でしょうか。加えて、私が個人的に大学と高校との間に人間的な関係性に基づくネットワークの構築の必要性を感じていますが、ご多忙な高校の先生方にはどのような感覚がおありでしょうか」。これは大学の方ですかね。酒井先生、いかがでしょうか。

酒井： 私は大学の組織があまり分かっていませんので、おそらくアメリカのアドミッションのようなものがあつたらいいのかと思ったりはします。正直、一番大事だと思っていることは、高校・大学が連携するにあたって、連携すると何をやっても仕事の隙間はできますので、間に組織があることはもちろん大事なのですが、むしろそこに信頼できる人間関係があるほうが連携、ポストは一気に下げると思っています。

立命館の例で言いますと、一貫教育部という組織がありまして、そこが附属と大学をつないでくれるんです。そこはもちろん公の組織ですから、公の組織があるおかげで、われわれ現場の教員が大学の先生と出会う可能性があります。たとえば、以前、総合心理学部の先生が来てくださったときに、飲みに行こうという話になりました。飲みに行ったら、話がとても盛り上がり、うちでやろうとしていることを大学もしようとされていて、来週月曜にメールでつながり「窓」というものを使って高大連携が始まりました。これは別に、間の組織を通していないわけです。いっぱい隙間はあるんですけども、正直、その信頼関係で埋まっているところがあると思っています。

ですから、何かしらの組織があることで可能性は高まるんですけども、最終的には人間関係だろうと思います。そうしたときに、「そんな感覚はおありでしょうか」については、おそらく高校の教員も、みんな感覚は多少持っていますが、どこまでそこに時間を割けるか個人差はあります。多分、それは大学も一緒ではないかと思えます。



乾： ありがとうございます。高大連携で非常に大事な部分で、組織があつてもつながらないところはいっぱいあります。どんな人を育てたいのかということの一致が、個人であれ、組織であれ、そのために何をするか、目的と手段を明確にしていくとつながっていくのではないかと思います。高大の接続が、入試だったり、出張講義だけに留まらず、しっかりと地に足を着けた議論をした上でやるといいのではないかと思いますね。

(スライド26)次に寺田先生へご質問です。「学びのイノベーションを進めるにあたり、現場教員のコンセンサスを取ることは必要なのか。それとも、個の教員の資質を信じて突き進むのか。個の強い教育現場ではコンセンサスを取ることが不可能なような感じがします」。なるほど、個人商店みたいなことはよく聞きますけれども。

寺田： これは、いい質問ですね。多分、高校で取り組んでおられる多くの先生方は、こういうことを感じているのではないかと思います。高校現場で探究が好きだと言うと、どうしても

変人扱いされたりする傾向がありますよね。そういう状況の中で、これが完全に正解かは分かりません。アメリカのものなので、日本でそれがそのまま通じるかどうかはあれなんですけれども、そういう研究をしたものがあります。

(スライド27) アメリカは心理学とか組織マネジメントの研究が強いので『The Human Side of School Change』という、学校を変革しようとしたときの人間の心の中が書かれた本があります。これは残念ながら和訳されていないので、英語で読んでいただくしかないんですけども。この中に変革、改革をしようとするとき1L3Cというのが必ず起きると言っています。これは中身の正当性に関わらず、学校の中でこの1L3Cは絶対に起きます。まず先生方は喪失感を感じて「今までやってきたことは何だったんだ」という気持ちになります。能力への脅威、つまり先生方の板書、あるいは生徒指導ではなく、ファシリテーションなんですとなると、今までの能力はなんだったんだ、みたいな話になって、どうしたらいいのか分からなくなって、困惑をして、最終的に「おまえは校長派か、校長派じゃないのか」みたいな対立が起こります。これは、絶対に起こると言われています。

(スライド28) もしスライドが必要でしたら後でお渡ししますが、これが起こるという前提でどう解決していったらいいのかという解決策が、この中のコンフリクトのところをご覧くださいと、トリアージせよと書いてあります。トリアージというのは、医療用語ですよ。つまり、緊急の患者なのかそうではないのか仕分けをしると言っています。トリアージをして、クリティカルマスを取れと言っています。クリティカルマスは、経営用語でいうと16%と言われたりするやつです。他の人たちが無視できないくらいのうねりにしろという話があります。最初に言ったように、否定的な人ほど乗ってくる時は乗ってくる場合があります。そうはいつても「あと2年で定年だし」みたいな人も含めて、どこまで行っても乗っ

てこない人はいます。そういうケースのときもあるので、トリアージです。つまり、こいつは一緒にやってくれるという人を見つけていって、ある程度のマスまで持っていく。そうすると、マジョリティが付いてきたりするような格好になりますから、打算的はありますけれども、戦略的な視点で見ても、こういうことをやっていくことが大事なのかと思います。

乾： ありがとうございます。酒井先生はこのあたりがうまいから、いろいろ改革が進んでいるのですかね。酒井先生は結構鋭いことを言っているけれども、あまり憎めないというか、腹が立たないというか、腰が低くて上手にやっていますよね。自然にやっているから難しいかもしれないですけども、このあたりの衝突を乗り越えるコツみたいなものはございますか。

酒井： コツは、僕が聞きたいんですけども。結局、組織にいますので、自分が学年主任であれば、当然、学年のことは責任持たなければいけないですが、その役割で権限を持っていることと、どうしようもないことがあると思うので、そこだけは意識はしているつもりではいます。

乾： (スライド29)なるほど。この次の問題が、これですね。あと4分くらいですが、次に行きます。酒井先生、先ほどの話とつながると思うんですけども「探究よりも詰め込み型学習の偏差値のほうが楽なキャリア教育なので、経験豊富な教員ほど抵抗が強いです。一緒に伴走するよりも指導するほうがローコスト・ハイリターンなので、教員の意識改革が進みません。本校は私学の進学校なので、学びの授業をどちらに振るかが直面している課題です」。これについてはいかがですか。なかなか難しいかもしれませんが。

酒井： 多分、これはフロアの管理職をされた方の方がいいお答えをお持ちだと思います。私

は数学ですので、数学の授業の方がもちろん楽です。ちゃんと決まっていますからね。ただ、二項対立ではないのではないかと私は思います。学びの事項をどちらに振るかについては、両方大事な気がしています。いわゆる進学実績という狭い範囲だけで考えたとしても、京都にある難関大学の合格者が多いと言われている学校は、よく見たら二軸で受からせているみたいなことがあります。学校としては両方をちゃんとやっていて、結果的に狭く入試で見ると、総合型と言われている特色と一般とで足すから多くなっているのです。どちらに振るかを言い出すと、ちょっと難しい議論になるのではないかと思います。学校改革で学校をゼロから作り直すのであれば、どちらに振るかという議論になる気はするんですけども、今、学校があつて、今すぐつぶれるわけでもない状況であれば、ゼロヒャクではなくてバランスではないかと思います。フロアの方、補足をお願いしますという感じです。



乾： そうですね。やはり、現実的なものもありますし、いきなり思い切って右から左にというわけにもいかないという、上手にバランスを取りながらということなのでしょう。

(スライド30)では、こちらが最後になります。お二人へということでございました。「改革を推進するために、ミドルリーダーして何を意識して仕事をされていますか」。何を意識したらいいのかということも含めて、リーダー的な立場、トップではないところも含めて、どういうことを意識されているのか、お願いできま

しょうか。

寺田： 難しいですね。でも、とにかく、今の酒井先生の話とちょっとつながりますけれども、あまり白黒を付けないようにしようかなと思っています。教育現場というか、学校の先生方は二項対立、白黒が好きなんですよ。これが善で、これが悪だという「あいつは何も分かっていない」みたいな感じになりがちなんですけれども、そうすると、先ほどの話のように、それぞれ思いがあるから、クリティカルマスに行かなくなるんです。だから、クリティカルマスに持っていくと、ある程度、大きなうねりにしようとしません。私の中では探究やキャリアがすごく大事で、もちろん核になるという信念はありますけれども、それを「探究やキャリアをやっていないやつなんて、人でなしだ」みたいな話をし始めると大変なことになるので、そうではなくて玉虫色にします。「先生の言っていることも分かりますよ」とか言いつつ「でも、こんなふうに考えてみると、ちょっと面白いかもしれませんね」みたいな、酒井先生が上手そうなことを言いながらやっていくみたいなのところですからね。

子どもたちの人生が大事なんですけれども、ミドルリーダーとしては職員の人生も大事だし、教員の人生も大事なので、それを全部否定したら、みんなやる気もなくなるでしょう。そうではなくて「先生方がやってきたことも大事だよ。良かったよ。でも、同じ目標でもこういう生き方もあるよね」というような話ができるようにするところを特に気を付けている感じです。

酒井： 自分は学年主任とか分掌部長という立場を経験しましたので、現場の中では上と下に挟まれるポジションかなと思います。何を意識していたかと、今、改めて考えていたんですけども、MustとWillとCanと3つの円があると思うんですけども。当然、やらなければいけないMustはあるんですが、Mustは意識しながらWillだけを見ようということは常に意識してい

た気がします。それは自分のWillだけではなくて、同じチームの先生方もそうなんですけれども、探究のカリキュラムをつくらなければいけないときに、それはキャリア教育を核とした、自分がやりたいことでもありましたし、重なった部分を形にしていきます。例えば、先ほども宣伝しましたけれども、校外研究会をやりますと言ったときに、仮に私も立場でしたいと思っても管理職からすると難しいと思います。なぜなら、金土と使って大変ではないですか。でも、そこに文部科学省の指定が入っていれば、やらなければいけないということがありますよね。

やらなければいけないとなったときの中身は、こちらで考えられますので、現場で発表者の方がいらっしゃったら、発表していただける場をつくるとか、面白い先生が来てくださったら、会いたい現場の先生と一緒にセッティングするとか、そういうのは楽しいではないですか。仙台三高の前校長先生が「教員なんか、どうせやってもやらなくても給料は一緒だから、楽しまなかったら損だ」と言われたことがあります。あの先生は重責であったから楽しかっただけではないと分かりながら、そう言われていたので、その先生ほどの重責があるわけでもない自分も楽しもうと思ってやっている感じです。答えになっていますかね。

乾： ありがとうございます。今3時になりましたので、最後のお話をしますと、寺田先生からは対立しない智慧とは玉虫色というお話がありました。生徒、あるいは先生の今を認める、まずは肯定的に受け入れることが大事ですね。その言葉は、酒井先生のMust、Will、Canの、Canの部分をもまず認めていくというところなのかなと思いました。そういうふうに認めた上で、Mustのことをやってね、ということを行いながらも、Willの力、意思の力、あるいは未来をつくる、ここを信じてやっていくという、この辺のところがうまくいけたら少しずつ前に進むのではないかと

というふうに思いました。

このシームレスでポータレスな問いはまだまだ尽きませんが、この後の分科会、それから交流会でさらに探究していただけたらと思っております。これで指定討論を終わりたいと思いません。ありがとうございました

スライド 1

指定討論
14:00~15:00

スライド 2



京都橘大学
経済学部 経済学科 教授
乾 明紀

研究領域・テーマ

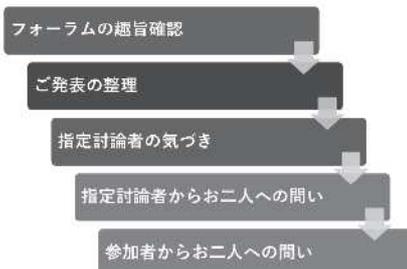
- キャリア心理学
- キャリアデザインに関する研究
- 高校生の探究活動に関する研究

主な委員会等

- 2019/04~
京都市市長官邸生涯学習推進委員会 (2024年度
より継続)
- 2022/08~
大学コンソーシアム京都京都市立大学連携推進室
コーディネーター
- 2021/04/01~
京都府立高野高等学校生涯学習委員会 会長
- 2019/32~2020/03
文部科学省「2019年度地域力の創出による高等
学校教育の質の向上等に関する調査研究」モデル型
指定討論の推進力者

スライド 3

指定討論の流れ



スライド 4

第22回高大連携教育フォーラムの趣旨

今回のフォーラムでは、探究をとおした「学び」が高等学校から大学、社会へと向かう一人一人のキャリア形成とどのようにつながるのか（つなげるのか）。

加えてこの「学び」の経験の往還（キャリア教育含む）を通じたよりよい学校づくり・社会づくりのあり方を探る。

スライド 5

寺田先生のご講演

- 日本も含め世界に共通する教育の課題は、
「①動機付け（入口）」と「②転移（出口）」
- この2つに共通することは「**学びの価値づけ**」
⇒生徒が自ら発見し、価値づけすることが大切
- 探究的な学習もキャリア教育も「**学びの価値を対話を通じて探す旅**」
⇒教育改革もトップダウンではなく、教員自らも発見し、価値づけすることが大切

スライド 6

酒井先生のご講演

- テストの成績は世界トップレベルだが、生徒は将来の夢がない、**社会の作り手だと思えない**…
⇒その要因は、「お客様（サービス受益者）」かつ「管理・指導による学習」モデルの生徒観にある。
- この生徒観を変えるのは、学校での「**出会い**」・「**原体験**」と「**キャリア教育**」
⇒キャリア教育では、**振り返りと対話**によって、生徒自らが「マイ・テーマ」を見出すことが重要。 ×お客様のキャリア教育はNG
⇒振り返りと対話により「**マイ・ラーニング・ストーリー**」や「**Will**」ができていく。

スライド 7

お二人のご講演からの気づき①

酒井先生のご発表にあった「振り返りと対話」による「マイ・テーマ」、「マイ・ラーニング・ストーリー」づくりは、寺田先生の「学びの価値づけ」（「転移（出口）」と「動機付け（入口）」）の実践であると感じた。

スライド 8

このようなサイクルが大事といわれる中で、

探究学習のサイクル

AARサイクル

探究の学びを価値づけたり、さらなる学びやキャリアの見通しにつなげることが課題となっている。

指定討論・質疑応答

スライド 9

お二人への問い①

・探究の学びは、どうすれば価値づけされるのか？
（生徒だけでなく、教員にも）

このようなサイクルが大事といわれる中で、

スライド 10

1. 課題設定

2. 探究活動

3. 振り返り

4. 転移

スライド 11

5. 振り返り

6. 転移

スライド 12

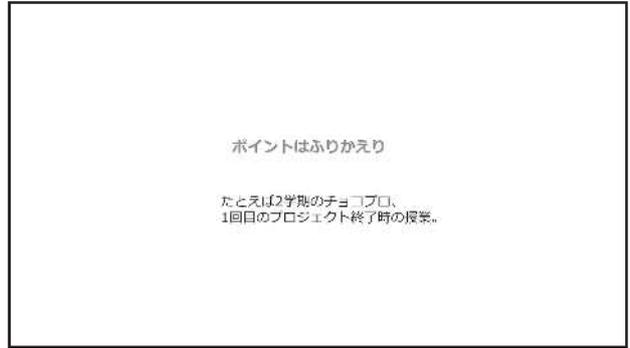
7. 振り返り

8. 転移

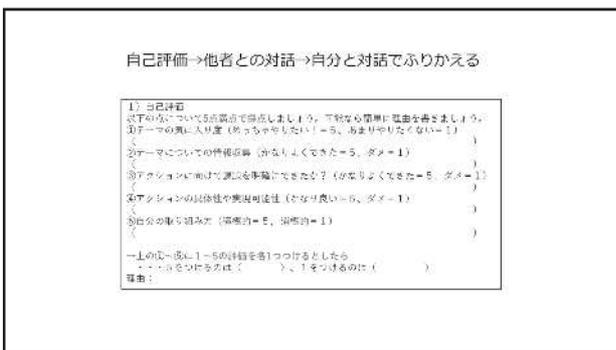
スライド 13



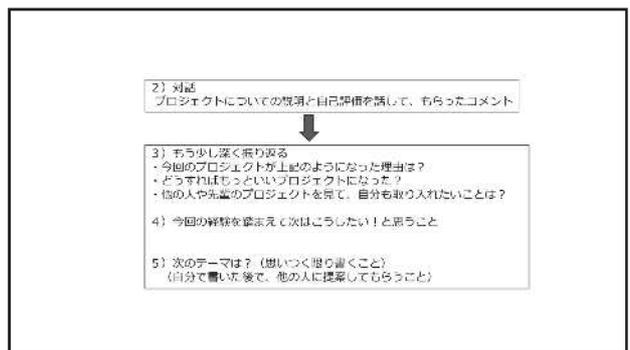
スライド 14



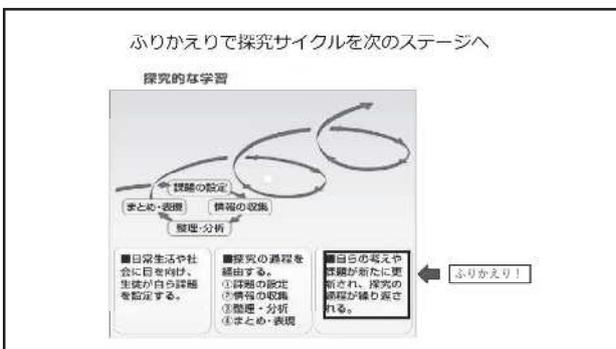
スライド 15



スライド 16



スライド 17



スライド 18



スライド 19

お二人のご講演からの気づき②



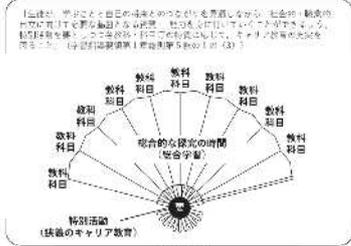
探究の成果報告会（発表会）を全校規模で実施する高校も増えてきた。

しかし、生徒が自己の生き方・在り方（キャリア）の探究成果をまとめ、報告する機会はまだあまり目にしない。

スライド 20

キャリア教育は、扇の要と言われている

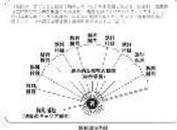
「生徒が、自分ごとと自己の将来とのつながりを意識しながら、社会的・職業的
 ために有用な学習活動に取り組むことで、自己実現に向けていくことができれば、
 自己探求を軸としたキャリア教育・学習の成果が期待される。キャリア教育の成果を
 可視化する。学校は探究学習とキャリア教育を軸とした教育（図）」



スライド 21

お二人への問い②

- 学校での様々な学びの成果をまとめ、自己の生き方・在り方（キャリア）や学びを見通す機会としてのキャリア教育は、なぜ探究学習ほど盛り上がらないのか？ どうしたら実現できるのか？



スライド 22



スライド 23



スライド 24

参加者からお二人への問い①

【酒井先生へ】

- マイテーマの設定について。私は本校の2年次の探究において人文ゼミを担当しています。そこでは、設定するテーマが社会課題の解決や自分のキャリアに繋がらないものが多く、着地点が難しいという問題が毎年起こっています。個人的には生徒の興味関心を大切にしたいですし、全てを社会に繋げる必要はないと考えているのですが、このような人文系のテーマ設定について、御校ではどのように実践されているのか、お伺いしたいです。

スライド 25

参加者からお二人への問い②

【酒井先生へ】

- ・両大間で「教育の接続」を行なう場合、大学側どのような体制があればよいですか？大学の研究・教育の情報発信、両大連携センター等の組織の設立などありますが、先生が一番重要だと思うことは何でしょうか？

加えて、私は個人的に、大学と高校との間に「人間的な関係性に基づくネットワーク」の構築の必要性を感じていますが、ご多忙な高校の先生方には、そのような感覚はおありでしょうか？

スライド 26

参加者からお二人への問い③

【寺田先生へ】

- ・学びのイノベーションを進めるにあたり、現場教員のコンセンサスをとることは必要なか、それとも他の教員の資質を信じて突き進むのか。個が強い教育現場では、コンセンサスを取ることは不可能のように感じます。

スライド 27

変革が引き起こす、教員の“1 L 3 C”

Loss (喪失感)

- ・ Challenge to Competence (能力への脅威)
- ・ Confusion (困惑)
- ・ Conflict (衝突)

(Evans, B. (2001). The hidden side of school change: Reform, resistance, and the 1L3Cs of teacher change. Journal of Research in Education, 22(1), 1-10.)

スライド 28

“1 L 3 C” 克服に向けた、組織マネジメントのポイント

	ポイント
前提	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 「変革しないこと」のリスクの認知・共有 () 解決法」を議論する前に、学校が直面する「問題」について、まず教職員間で合意し、次に保護者やOB等とも共有する。 ▶ チャレンジのリスクを軽減(心理的安全性の確保)
Loss (喪失感)	<ul style="list-style-type: none"> ▶ これまでの取組や努力との連続性の確保・確認 ▶ 教員による試行錯誤の時間の確保(焦り過ぎない) ▶ 教職員 1人1人への関与と配慮
Challenge to Competence (能力への脅威)	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1人1人の実態に応じた、一貫性ある、継続的な能力開発と支援
Confusion (困惑)	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 責任と権限、意思決定プロセスの明確化 ▶ 変革のゴール・価値観と、リーダーの発言・行動の一貫性
Conflict (衝突)	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 「トリアージ」による「クリティカルマス」の確保 ▶ 適切なプレッシャーと権力の行使 ▶ 衝突の「顕在化」と、組織による解決

(Evans, B. (2001). The hidden side of school change: Reform, resistance, and the 1L3Cs of teacher change. Journal of Research in Education, 22(1), 1-10.)

スライド 29

参加者からお二人への問い④

【酒井先生へ】

- ・探究より詰め込み学習(偏差値偏重)のほうが楽なキャリア教育なので、経験豊富な教員ほど抵抗が強いです。一緒に伴走するより、指導する方がローコスト、ハイリターンなので、こちらも教員の意識改革が進みません。本校は私学の中堅進学校なので、学びの軸をどっちに振るか、直面している課題です。

スライド 30

参加者からお二人への問い⑤

- ・改革を推進するために、ミドルリーダーとして何を意識して仕事をされていますか？